講道館柔道 十段物語

第４回

戦後柔道界を支えた名人 三船 久蔵

本橋 端奈子

腕白少年、柔道家となる

三船久蔵十段

三船久蔵（きゅうぞう）は明治16（１８８３）年4月21日[1]、岩手県南九戸郡久慈[2]に、米問屋を営む三船久之亟（じょう）の末っ子として生まれた。元気の有り余った腕白少年で、色々ないたずらをしては周囲の者を困らせていたらしい。あまりに悪さが過ぎるので、13歳の頃、人間修行という名目で郡役所に給仕として預けられたこともあった。ところが勤め始めたはいいが、郡長に「給仕、給仕」と呼ばれることに腹が立ち、「自分は給仕ではなく久蔵です」と啖呵を切ってしまうなど、揉め事が絶えず、結局二週間と続かなかった。しかし、小さいながらこのような返し方が出来るのは、ただ腕白で乱暴者なだけでなく、頭の回転が速く、才気走るところのある子供であったように思われる。

三船が柔道と出会ったのは、仙台に転勤になった兄の平吉を頼って宮城県立仙台第二中学校[3]へ入学した頃である。その仙台の第二高等学校[4]で見た柔道の試合に感激し、自分も柔道を始めたいと思うようになったという。しかし学校に柔道場が無かったので、校長先生に頼んで道場を造るところから始まった。また指導者は特に居なかったため、二高の道場を覗いては技を覚え、その技を三船自身が学生らに教えるという形で修行を積んでいった。講道館へ正式に入門こそしていなかったが、三船は上達が早く、同窓の中では抜群に上

手かった。数年すると、近隣の中学に指導に赴いて謝礼を貰うまでになっている程であった。

中学を卒業する頃には、柔道というものが好きでたまらなくなっていたという。柔道をもっと修行したい、そして何かを成したいという思いを持った青年が東京を目指すのは必然であったであろう。三船が講道館入門を目指して上京したのは明治36（1903）年20歳の夏のことであった。[5] 三船は、「同じ教えを受け修行を積むなら、最も強い最も名の響いた大将たるべき人がよい」[6]と考え、当時最高段の六段であった横山作次郎の家へ、突然押しかけていった。横山は嫌がりもせず、また三船を大変気に入ったらしく、三船はそのまましばらく横山家居候の身となる。そして、講道館に正式に入門が許されたのは、同年7月26日のことであった。横山と三船は、以降深く師弟の交わりを続けることとなる。

異例のスピード昇段

郷里で5年ほど修行を積んできた実力を買われ、三船は甲組に編入された。念願の講道館に入門できた嬉しさもあって毎日のように稽古に通っており、いよいよ本格的に柔道で身を立てたいと考え始めていたようである。しかし、三船の両親は、彼には大学へ行って勤め人になって欲しいと思っており、はじめ早稲田大学予科、その後慶応大学理財科に入れられ、経済の勉強を無理にさせられていた。そんな状況に嫌気が差した三船は、ある日突然大学を退学してしまったのであった。怒ったのは両親である。「柔道家になるなら金は出さん」と、三船への一切の仕送りを止めてしまった。そのころ下宿をしていた三船は、服や布団を売っても下宿代は滞ったままで、とうとう座布団のみを抱えて下宿を出ることになる。4日ほど水のみで命をつなぎながら、頭の回る三船は、どうにかお金を捻出する方法を考える。そこで思いついたのが、「はやり髪」と「懸賞新報」という二つの雑誌の出版であった。[7] 雑誌はそこそこ儲かったようで、こうして三船は貧乏時代を乗り切ることが出来たのであった。

このように金銭面ではやや苦労していた三船であったが、柔道の修行には余程打ち込んでいたようである。前田光世や伊藤徳五郎、轟祥太、佐竹信四郎など、[8] 仙台には居なかったような猛者たちがひしめき合っている講道館で、三船は嬉々としてそれに揉まれた。159㎝57kgと体は小さかったが、負けん気は人一倍強かった。[9] 体の小ささは練習量と頭の良さで補った。他人が1時間稽古するならば自分は倍の2時間稽古をし、また合理的・科学的な技の掛け方を研

究した。そうした努力でめきめきと実力をつけ、明治37（１９０４）年秋季紅白勝負に無段者の大将で出場した三船は、初段を４人投げ飛ばし、即日で念願の初段への昇段を果す。そして、そのわずか数ヵ月後の明治38（１９０５）年２月の月次試合では９人抜き[10]を果し、月次では異例の即日抜群昇段で二段となった。また、翌明治39（１９０６）年１月14日には三段へ、明治40（１９０７）年５月の紅白勝負ではまたしても抜群で四段へと、例外的なスピードで段位を重ねていくのであった。

「ミフネヲタオスナ」

明治42（１９０９）年の鏡開式では、25歳の若さで五段に昇段し、東京大学や日本大学、明治大学などで柔道教師となっていた三船であったが、この当時は若さもあってか、よく往来で喧嘩もしたという。横山や、後輩の徳三宝[11]らと飲みに出かけては、様々な所で名を轟かせていたようである。[12]そしてそのことで、よく嘉納師範から小言を頂戴していた、と三船は後に述懐している。嘉納師範について三船は、師範の死後、以下のように語っている。

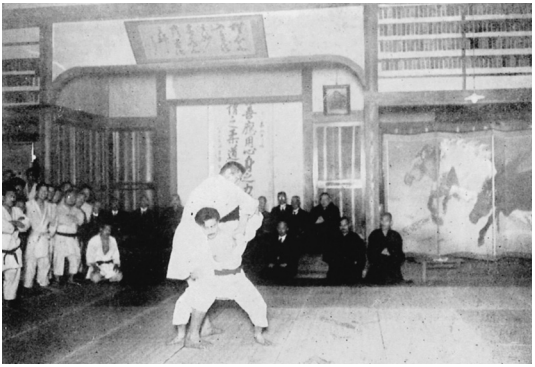
一体に先生は人を見る目が高くて、この人間はこういう方面に才能があるということを見抜いて、それに向くように指導された方だった。それからまた先生は、柔道の研究会などでも弟子たちの説明をよく聞かれて、これはいいなと思うものは躊躇することなく取り入れられた。私なども次々に技を研究しては、その理論を説き実際をお目にかけると、先生はそれに新しく適切な名をつけてどしどし講道館の技の中に取り入れて下さった。私が研究してやり始めた「隅落」「大車」その他を命名して下さったのも先生であった。[13]

このように、数万の講道館員の頂点としての指導者ぶりを素直に尊敬する気持ちが見て取れるが、若い当時は、物怖じせず師範に柔道の事などで異見を唱え、怒られたり、また討論になることが少なからずあったようである。そのことで三船は、長く師範から可愛がられていないと思い込み、少々気に病んでもいた。そんな中、大正４（１９１５）年32歳の頃、三船は北海道の小樽へ柔道教師として赴いていた。そこで、ふとした傷がきっかけで三船は丹毒を患ってしまった。当時の丹毒はほとんど死病で、三船も高熱にうなされ、もう駄目かと思われていた。そこへ、嘉納師範からの電報が届いたのである。そこには一言、「ミフネヲタオスナ」とだけ、記されていたのであった。これを聞いた時の三船の感動はたとえようもなかったという。三船

はこの感激を

「ミフネヲタオスナ」という電文は短いけれど、そこには「三船は将来役に立つ男だ、死なしてはならない、最善の努力をしてなんとしてでも生かしてやれ」という（嘉納）先生の実に大きな御愛情が溢れているではないか。「ああ、先生はやっぱり自分を認め、自分を愛していて下さったのだ」と、そう思うと嬉し涙がポロポロとこぼれた。私が自分の長所である柔道に一生を捧げようという気持にほんとうになりきったのは、実にこの時だった。[14]

と、書き綴っており、この時に、柔道に人生を捧げよう、そして師範の期待・愛情に応えようと心に決め、師範への尊敬の念を確固たるものにしている。まさに後に「柔道の神様」と呼ばれる三船久蔵を造りだす人生の転機であったといえるであろう。



力士を相手に乱取稽古をし、肩車で投げようとするところ（大正12年）

佐村嘉一郎との特別乱取

柔道に専心し一筋に生きようと決めた三船は、以前にも増して稽古に打ち込んだ。いつも一番先に講道館に来てずっと休まずに稽古を続け、帰るのは必ず最後であったという。[15]一ヵ月間の暑中稽古中に千本稽古の発願をして貫徹したこともあった。身体を鍛えるために色々な工夫も考えた。指先の鍛錬のために、土踏まずを盛り上げてそこに富士山の絵を描いた下駄を特別に作り、絵を踏まないように指先で歩いていたという。[16]また、三船は普通よりかなり足が長く、これが強さの秘訣では、と言う者もあったが、やはり他人の倍を目指して積んできた稽古量の賜物であろう。三船は、そんな烈しい稽古を辛いと思ったことは一度も無いという。「柔道をすることが、この上もなく楽しく面白くてたまらない。柔道こそが生命だった。毎日喜々として修業に励んできた」[17]と述べていることからも、その柔道への情熱が読み取れよう。その稽古量と比例するように三船は上達した。稽古を願う者は、まさに立っていられないくらいにやられたという。[18]そして大正6（1917）年1月には六段、また大正12（1923）年1月には七段

へと昇段を果す。また同年40歳にて講道館指南役を命じられるのであった。

三船の人生に於ける大きな試合というのはいくつかある。その中の一つは、昭和5（1930）年11月16日、七段当時に行われた第1回全日本柔道選士権大会での、佐村嘉一郎七段[19]との高段者乱取であろう。乱取といっても、勝敗が決まらないだけで真剣な試合そのものである。これまで、高段者同士の試合というのはあまり組まれたことが無く、また柔道家や柔道ファンなら誰もが望むものであったので、今回のこの三船対佐村は、まさに全国の耳目を集めた闘いであった。この乱取の様子が描かれたものを以下に掲げる。

両士ススッと畳をすって試合場の南隅に来た一瞬、三船七段の鋭い目がキラリと光り「えいっ」と右足払を一閃。佐村七段の体は1本の棒のように宙に浮いて見る者はひとしく「一本っ」と覚えたが、畳上30センチの空間に体をかわして背を打たず。満場の見学者は思わず「うーん」と感嘆の吐息をついた。組み直して再び中央で右自然体。双方慎重に組んだが、両士の顔色にありありと戦機熟す―という色が見られた。だが、両士の姿勢はいささかの乱れもなく、鮮やかな体のさばき、特に佐村七段は三船七段の足払の一撃を喫しながら心身ともにいささかの動揺も見せず、闊達自在進退の妙を発揮している。そのときシュッと畳をすった佐村七段の足音と共にビュッ！と得意の膝車の奇襲。虚を衝かれた三船七段は体を崩して、トトッと片手をついて危うく逃れる。「すわ、寝技？」と満場思わず息を止めたが、意外にも寝技に長じた佐村七段は、深追いをせず「立てっ」と表情でつっ立っている。折から神宮外苑の空は黒雲深く垂れこめて今にも雨が降り出さんばかり、だが2万の大観衆は、両士を見つめて気を散らす者はいない。3度、双方右自然体で組んだが、戦機いよいよ白熱、凄壮の気惻々（そくそく）として見学者の胸を打ち、言うようなき一脈の鬼気が漂う。この時三船七段の巧妙なる体さばき、一段とスピードを加えるとみるや、1歩踏み込みながら敵体を押し上げ、浮かし気味に「えーいっ」と気合い鋭く放った隅落一閃、つくりは充分、気合い満点。佐村七段の体は弧を描いて飛んだ。（審判の）山下義韶（よしつぐ）九段は「それまで」と宣して試合は終わった。この水際だった決まり技に、大観衆は大きな拍手を惜しまなかった。[20]

三船が長年研究を重ねてきた隅落が見事に決まった様子が見て取れよ

う。隅落とは師範が名づけてくれたもので、別名「空気投」とも言う。三船は、相手に一指も触れず気合いによって敵を倒す技をなんとか編み出そうとし、それに近い形として、手だけが触れたときの体捌きによって敵を倒す方法を考えた。そうして苦心の末完成したのが、「敵の両袖を取って、動く瞬間に身を低めつつ、敵を押し上げてその中心を奪う」[21]空気投であった。三船のこの空気投は、後に一世を風靡するまでに有名になる。

自他共栄 中心帰一

佐村との乱取の2ヵ月後、昭和6（1931）年1月25日に48歳で八段へと進み、そして昭和12（1937）年12月22日には、54歳にして九段を許されることとなる。[22] 年明け早々に東京オリンピック招致のため渡欧する師範の、最後の置き土産であった。そして、これが師範との今生の別れとなったのであった。師範を失った三船ら講道館門人の悲嘆は計り知れない。だが、悲しみの中でも、三船は師範のある言葉を思い出していた。かつて三船が六段へと昇段した際に、師範が言われた言葉である。

（嘉納）先生はこう言われた。「永岡とか三船とかは実力、技術、勤勉、技能においてはすぐにでも十段をやっても宜しいが、5本目の指は曲げられない」と。（略）「その1本は何でしょう」と僕も訊いてみた。すると「ぢゃ、よし、おれがいまここに問題出すからお前この問題に答えろ、講道館の修行の最終の目的は、己を完成し、世を裨益するということになっている。これをお前立派に説明できればすぐ十段やってもよいのだが、まだなかなかこの説明はできまい」という。（略、三船は）「その答えならすぐに出来ます。それは『馬から落ちて落馬した』ということと同じでしょう。落ちたといえば分かるのにもう一度落馬したというようなもので、古いです」といった。先生はニコニコしておられたが「お前のいまはそれでも良いだろうが、それぢゃまだまだ足らん」という。ぼくの言うのは己を完成すればそれで良いと思っていたのです。柔道修行の目的は己を完成しさえすれば良いと思っていた。[23]

かつての若い自分は、己の完成のみにしか考えが及んでいなかった。だが、だんだんと三船にも師範の言う「世への裨益」、つまり「自他共栄」の意味と重要性が感じられるまでになっていたのであった。亡くなった師範の言葉通り、自分の身につけたものを世に裨益しなければ、そしてこの柔道界を自分が引っ張っていかなければ、という強い前向きな気

持ち、そして使命感が三船にはあったのではないであろうか。

だが、時代は日中戦争から第二次世界大戦へと突入し、講道館も政府の外郭団体となるなど不遇の道を歩むこととなる。そんな戦争末期の昭和20（1945）年5月25日、三船はかつてまだ3人にしか許されていない十段に列せられることとなった。嘉納師範の跡を継いだ南郷次郎講道館長が与えた、初の十段である。急に南郷館長から連絡があり、十段のことを告げられ、三船はかなり驚いたという。かつて嘉納師範の言っていた、「十段」の意味を改めて胸に思い起こしていたことであろう。十段位をいただくからには、故師範の言う「十段」を体現したい、そんな想いを持ったと想像できよう。

また、この頃より三船の柔道研究は新たな境地に達していた。相手を倒すことより、倒れないことを志すようになり、そのためには常に中心を失わないこと、つまり「球」を目指すようになったのである。球には常に真ん中に重心があり、それを意識すれば倒れない、と考えた。そして「押さば回れ、引かば斜に」という原則を打ち立て、球の中に、柔道の原理以上に人生の原理をも見出したのである。人生においても心を空にして、その中心を保ち続けること、常に中心へ帰一[24]することが肝要である、と考えたのであった。

そして迎えた終戦。GHQによる学校柔道の禁止など、柔道界不遇の時代は続いたが、そんな中、三船十段は南郷館長や永岡十段らとともに、昭和20年10月より、米軍への柔道紹介のデモンストレーションを敢行している[25]。これは、実業家であり政治家でもあった堤康次郎が「敗戦国日本としては、柔道以外にアメリカ軍将兵に見せるべきものは何もない[26]」という理由で発案したものであった。結果として、このデモンストレーションは大成功であった。1500人もの米軍将兵は、三船十段の圧倒的な存在感に圧され、また神業の数々に完全に魅了されたという。これを機に、彼らの態度が軟化して、円満に渉外問題がはかどっていったそうである。堤はこの三船の功績を「三船十段の外交的引きの力」であると回想している。こうした、柔道の火を絶やすまいとした地道な活動が実り、再び講道館・柔道界もかつて以上の活況を取り戻すまでになったのであった。

三船は、師範の「自他共栄」の言葉をかみしめ、柔道界を牽引し続けた。磯貝一、永岡秀一、飯塚国三郎、佐村嘉一郎、田畑昇太郎ら、かつての先輩・友人であった十段は、みな鬼籍へと入って行った。それでもただ一人の十段として、世界に広まっ

た柔道の顔として、態度でそれを示し続けた。寒稽古・暑中稽古の無欠席記録は62年にまで伸びていた。[27] そして、昭和39（1964）年、嘉納師範が東京に呼ぼうと尽力した東京オリンピックが26年越しに開催となり、柔道は正式競技とされ、三船はその運営委員を引き受けた。嘉納師範の目指した東京オリンピックの実現を見届けることができて、きっと感慨深いものがあったであろう。80を超えた高齢にも関わらず、記念行事などに精力的に参加をする姿が印象的であった。しかしオリンピック後より体調を崩し、入院を余儀なくされることとなる。咽喉腫瘍であった。そしてわずか3ヵ月の入院の後、肺炎を併発し、三船はこの世を去ったのであった。享年82歳。最期には、郁子夫人の差し出したノートに「自他共栄　中心帰一」と書き記し、これが絶筆となった。[28] 嘉納師範の遺した「自他共栄」の教え、そして自らで掴み得た、「球」を目指す「中心帰一」という、柔道と人生の原理。まさに三船の生涯の結晶のような言葉であろう。三船はその多大な功績により、講道館葬をもって送られた。

三船十段の絶筆
「自他共栄　中心帰一」

最後に、三船が自らの古稀を記念して作詞をした、柔道の歌をここに紹介したい。

柔道の歌

一．稽古する時　邪念なく　心も軽く
　身も軽く　中心帰一の理りを
　忘れずはげめ一筋に
　これぞ真の柔の道　これぞ真の
　柔の道

二．百錬千磨の巧を積み　七転八起
　の妙を得て　解脱の道を悟りな
　ば　変応自在の球となる
　これぞ真の柔の道　これぞ真の
　柔の道

三．柔の道には国境なく　柔らぐ心
　に敵はなし　世界の人々手を組
　んで　樹てむ平和の理想郷
　これぞ真の柔の道　これぞ真の
　柔の道[29]

（図書資料部）

＊引用文献は、現代漢字・仮名づかいに改めた。

《主要参考文献》
『柔道回顧録』三船久蔵著　黎明書房　昭和28年
年譜『柔道の真髄　道と術』三船久蔵著　誠文堂新光社　昭和40年

《その他典拠・註》
1　戸籍登録日。講道館にある三船直筆の入門願書には「明治17年4月4日」とあるが、この稿では、後に三船により出版された

『柔道回顧録』などの記録に従った。

2　現在の久慈市。南九戸郡は明治29年に九戸郡、昭和29年に久慈市となる。

3　当時の宮城県第二中学校。明治37年改称

4　通称「二高」。現在の東北大学の前身の一つ

5　「回顧七十年　座談会」『柔道』第32巻第12号(昭和32年12月)

6　「横山先生の追懐」『柔道』第2巻第9号(大正5年9月)

7　「貧乏書生時代の思い出　～三船名人訪問記から～」『近代柔道』第6号(昭和32年10月)

8　「永岡秀一十段を偲ぶ　座談会」『柔道』第24巻第2号(昭和28年2月)

9　「門下の一人として」三船久蔵　『柔道』第31巻第10号(昭和35年10月)

10　当時は2本勝負だったので18本とった計算になる。9人目を2本投げたが「勝負あり」の声がかからず嘉納師範の方を見ると、試合を見ずに横山作次郎らと三船の昇段の相談をしており、その場で昇段が決まったということである。

11　後の講道館九段。昭和20年3月の東京大空襲で死亡した。柔道殿堂の一人

12　戯れではあるがやくざ者にピストルを向けられるも、突き付けられる前に抑え込んで負かしたこともあるという。

13　前掲註9参照

14　前掲註9参照

15　「三船十段を偲ぶ　座談会」『柔道』第36巻第3号(昭和40年3月)

16　三船十段記念館　展示写真より（岩手県久慈市川貫5-20-230）

17　「三船十段の追想31」宇佐美信　「柔道新聞」第627号(昭和49年3月)

18　前掲註15参照

19　後の十段

20　「佐村7段と三船7段の激闘」工藤雷介著　「近代柔道」第3巻第2号(昭和56年2月)

21　『柔道回顧録』三船久蔵著　黎明書房　昭和28年

22　この時、磯貝一・永岡秀一は十段に列せられている。

23　前掲註8参照

24　嘉納師範も晩年、「帰一齋」という号を用いていた。三船はそのことも意識にあったであろうと思われる。

25　「三船十段の追想」宇佐美信「柔道新聞」第592号(昭和48年1月)

26　前掲註25参照

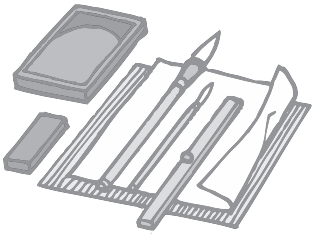
27　「寒稽古の思い出」三船久蔵　『柔道』第28巻第2号(昭和32年2月)

28　「ノートに自他共栄」朝日新聞夕刊　昭和40年1月27日、「三船十段の追想 65」宇佐美信　「柔道新聞」第709号(昭和51年10月)

29　「十段物語 三船久蔵の巻」久保正太郎著　『柔道』第61巻第1号(平成2年1月)

《写真典拠》

1．講道館柔道資料館　柔道殿堂展示写真より

2．「三船名人アルバム集」小俣実編著　新泉社（昭和32年）

3．「柔道新聞」第709号(昭和51年10月)